

心理尺度作成ガイドライン

尺度の作成を始める前に

- 1 測定したい概念についての理論的・歴史的背景を十分に理解すること
- 2 測定したい概念と類似する概念や既存の尺度との関係性(特に相違点)について明確にすること
- 3 測定したい概念について、広範な概念を扱うのか、狭義の概念を扱うのかを検討すること
- 4 作成する尺度が測定する概念についての定義をすること。測定する概念について、尺度得点が高い人がもつ特徴、低い人がもつ特徴を整理するのがよい
- 5 作成する尺度の対象者の範囲を決めること
- 6 尺度を作成する目的を十分に検討すること。特に尺度得点について、完成後にどのように扱うのかについて検討すること
- 7 翻訳版を作成する場合には、項目で測定している内容の意図を踏まえた上で、語感や表現方法として違和感のない項目とすること
- 8 翻訳版を作成する場合には、文化の違いを踏まえること。文化的に馴染みのない内容が含まれる項目は、測定したい概念以外の影響を受ける可能性がある

項目の作成・選定について

- 9 回答形式を決めること(e.g. リッカート式、T-F式、自由記述式など)
- 10 測定したい概念のどのような側面に対応する項目なのかを念頭に置いて作成すること
- 11 最初に項目を作成する段階では、より多くの項目を作成すること
- 12 同一の内容について肯定的な項目と否定的な項目を含むようにすること。これにより回答者のバイアスの影響を低減することができる
- 13 作成した項目の長さを確認すること。他の項目に比べて、特別長い項目は除外するのがよい

項目文の記述について

- 14 1つの項目では1つの内容を問うようにすること
- 15 質問の意図を正しく伝えること
- 16 完全かつ簡潔な文章を用いること
- 17 可能な限り少ない字数で書くこと。文章が長いほど複雑な構造となり、意図した内容が伝わりにくくなる
- 18 具体的かつ明確に問うこと。曖昧な言葉を用いないようにすること
- 19 専門用語、俗語、隠語、略語は避け、馴染みのある単純な語を正確に用いること
- 20 使用する語句に注意すること。使用する語句次第では回答が異なり、集計結果に影響を及ぼす場合がある
- 21 尺度を使用する対象者に言語レベルを合わせること
- 22 「～ではないですか」などの否定語で質問しないこと
- 23 望ましい回答があると思わせないこと
- 24 質問の内容は回答者にとって十分現実的なものにすること
- 25 誤字・脱字がないかを確認すること

回答選択枝の作成について

- 26 回答者が意味の違いを識別できる程度の選択枝数(段階数)にすること。多すぎる選択枝は結果として特性の違いが反映されないことがある
- 27 リッカート式を用いる場合、全ての評定カテゴリに対して文字によるラベル(説明)をつけること
- 28 中立となる選択枝が必要かを検討すること。傾向を二分したい場合には設けない方がよい
- 29 選択枝の構造や長さを揃えること
- 30 「常に」や「決して」などの強い表現は避けること
- 31 選択枝の内容に重なりがないようにすること

項目作成後の他の専門家による確認について

- 32 作成した項目のひとつひとつについて、測定したい概念との関連を確認してもらうこと
- 33 項目の文章が意図した内容として伝わるものになっているかを確認してもらうこと
- 34 測定したい概念について必要十分な項目の集まりになっているかを確認してもらうこと。必要に応じて、足りていない箇所を明らかにしてもらうこと
- 35 複数の下位概念をもつ尺度の場合、非専門家でも下位概念間の違いがわかるかを確認してもらうこと。また、非専門家にも確認してもらうことが望ましい

予備調査の実施・確認について

- 36 本調査の前に小規模な集団に予備調査を行うこと
- 37 項目の内容・文章について、意味が伝わりにくいところがあったかを確認すること
- 38 自由記述欄を設けるなど、調査項目や調査そのものへの意見を受け付けること
- 39 予備調査実施後には項目得点の分布および代表値・散らばりや範囲などを確認すること
- 40 予備調査を行う前に社会的望ましさとデタラメな回答などの、意図しない影響を引き起こさない項目になっているか確認すること。また予備調査実施後は、それらの影響がなかったかを検討すること

本調査の実施・結果について

- 41 本調査には十分な回答者数を得ること
- 42 本調査の対象者は尺度の測定対象と等質な集団にすること
- 43 逆転項目が正しく処理されているか確認をすること。また、項目間相関が負の値のときには、逆転項目の可能性を検討する必要がある
- 44 項目ひとつひとつについて、尺度得点との相関を確認すること
- 45 項目得点の分布および代表値・散らばりや範囲などを確認すること
- 46 ほとんどの人が同じ回答をしている項目がないかを確認すること。そのような項目は特性の差異を反映していない
- 47 因子分析などにより、因子の構造を確認すること
- 48 信頼性の確認をすること。内的整合性と再検査信頼性など、2通り以上の方法で確認することが望ましい
- 49 妥当性の確認をすること。特に外的基準について、測定している概念との関連性を明確にしておくこと

項目の最終決定について

- 50 回答者の負担と信頼性・妥当性を考慮して項目数を決定すること
- 51 1つの概念ないし下位因子の測定を過度に少数の項目に担わせないこと。少なすぎる項目からなる尺度は測定の妥当性を損なう
- 52 複数項目を削除する際には、一度にすべての項目を削除するのではなく、 α 係数の値などを考慮しながら削除する項目を決めること
- 53 本調査の回答者が十分な人数のとき、2つのグループに分け、1つ目のグループで項目の選定や評価を行い、その尺度がもう1つのグループで同様の結果になるかの確認をすること
- 54 妥当性、項目困難度、識別力、信頼性、項目の内容の全てを考慮した上で、最終的な項目を決定すること
- 55 因子構造・項目のまとまり・内容が当初想定していた概念を測定するのに十分なものを確認すること
- 56 十分な尺度が作成されない場合には、全般的な見直しを行い、再度予備調査から行うこと